

W D S

WORLD'S
DESIGN
MAGAZINE

変わりゆく世界を創造するキーワードとアイデア
Keywords and ideas for defining the ever-changing world



特集 | Feature

次のデザインは どこから？

リビング
モビリティ
ワーク
メディカル
ファッション
トラベル
エンターテイン

What's next in design?

LIVING / MOBILITY / WORK / MEDICAL / FASHION /
TRAVEL / ENTERTAINMENT



10

October 2020 | vol. 207



Interior & Design

—— 土田貴宏 ——
つちだ・たかひろ

デザイナー、ライター。1970年生まれ。
会社員などを経て、2001年からフリーランスで活動。国内・海外での取材やリサーチを通して、雑誌をはじめ各種媒体に寄稿。
インテリアや日用品を中心に、多様なデザインについて執筆している。



全体の調和を図りながら多様なレイアウトを想定した「タンガリ」。中央はデイベッド、右は右アームのみの椅子。

inodasveje.com

イノダ+スバイエ「タンガリ」、繊細さと生命感の理由

ミラノを拠点とする猪田恭子とニルス・スバイエのユニット、イノダ+スバイエによる「タンガリ」は、洗練された木の家具の魅力に溢れたコレクションである。細部まできめ細かく造形された、知的な雰囲気のあるデザインだが、生き生きとした息遣いのようなものも感じさせる。その秘密はどこにあるのだろうか。

一連の家具は、主な素材にチークと籐を使用。椅子はアームチェアとアームレスチェアのほか、右アームと左アームのタイプがある。片アームの椅子の間にアームレスチェアを置くと、ソファとしても使用できる仕組みだ。椅子のアームのない側面のディテールは、並べたときの収まりに配慮した。同様にテーブルと椅子を付けて置くこともできる。住宅からホテルのロビーまで、多様に組み合わせレイアウトすることが想定されているのだ。1点1点が軽量でコンパクトなので、輸送やセッティングがしやすいという利点もある。

製造するのはインドの家具メーカー、ファントムハンズ。すべての工程をバンガロール地方の工房で行い、自国の素材を用いて手仕事でつくることが前提にデザインされたという。イノダ+スバイエは2016年からファントムハンズと協働し、18年に椅子「ムンガル」を発表したことから、工房の技術や素材の強度についてノウハウを蓄えていた。今回はさらにメーカーにとって「一歩先、半歩先の提案」をしていったという。

例えばタンガリの籐編みは、手仕事の“サイン”でもある。機械で編んだ籐をカットして用いるメーカーも多いのに対し、木枠に籐を回して編み込むという手作業に独特の仕様を取り入れたのだ。その座面を、ぎりぎりの細さの曲線的な脚部のフレームが支える構造。アームの周囲の曲線や、座面の木枠と脚部のフレームの接点など、デンマークの名作家具に通じるメリハリのあるフォルムも、デザイナーがメーカーの持ち味を深く理

解している証に違いない。

サステナビリティをテーマに据えたデザインが増えている昨今、環境負荷の低い新素材や新技術が注目を集めている。そのなかにおいて家具は、古くからそうだったように、生態系を保つ森林資源を使い、エネルギー消費や廃棄物の少ない製造工程を実現すれば、十分にサステナブルなものづくりができる。タンガリは、こうした時代の感覚に寄り添いながら、それすら超えた木の家具の真価を主張しているように見える。

「少しでも手仕事を取り入れると、自然素材の家具が生き物のように変化することを、今まで仕事を通じて体感してきました。インドにおいても手仕事は工業化の波に飲み込まれようとしています。現在はその最終章であり、手仕事の家具は最後の究極の贅沢品なのだと思います」と猪田。優れた家具を生み出すことは、この理想的な循環をさらに未来へ引き継ぐ原動力になり得る。